

# 鹿屋市武道館における幼少年剣道指導実習の試み

前阪茂樹\*, 國分國友\*

## A PROGRAM FOR IMPROVING YOUTH KENDO INSTRUCTION

Shigeki MAESAKA\*, Kunitomo KOKUBU\*

### Abstract

An effective kendo instructor should have leadership ability and a thorough knowledge of kendo, including theoretical knowledge, practical skill, and the ability to judge matches. At the National Institute of Fitness and Sports, students in the kendo program are being trained to become effective leaders in this martial art, and a recent program has been initiated to improve their kendo instructional techniques. In the program, NIFS kendo club members give instruction to youth members of the Kanoya City Youth Kendo Club at the city budokan. The program has been helpful in giving promising kendo instructors the opportunity to hone their leadership skills, and has also been effective in building ties with the community. This paper reports on how the program has been carried out and how positive interaction between the instructors and youth in the community has been fostered.

**KEY WORDS:** *Instructional techniques, NIFS kendo club, Kanoya City Youth Kendo Club, Community ties*

---

\* 鹿屋体育大学 武道講座 Department of Budo National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan

## I. はじめに

鹿屋体育大学（以下、本学）は、国内で唯一の武道の専門課程を持つ国立の単科大学である。言い換えれば、本学の武道課程は将来の武道（柔道・剣道）の実践的な指導者（＝専門家）を養成する機関であるといえ、これが本学の特色であると自負もしている。そして、本学の教育内容は、スポーツ、レクリエーション及び武道に関する科学的な基礎知識を身につけ、幅広い応用能力と優れた実技の指導能力を持つ体育指導者を養成するためのカリキュラムが組まれている。

平成12年度における本学のカリキュラムのうち、剣道に直接関連する科目は、「運動方法学」、「剣道論」、「剣道実習」、「剣道」であり、その他は「武道学演習（剣道）」となる。この中で、武道課程剣道専攻として剣道の指導者養成のための核となる授業は、剣道論・実習である。これらは剣道の専攻学生必修であり、平成11年度のカリキュラム改正で若干の選択範囲は広がったものの、剣道実習は3年間の履修が義務づけられている。しかも履修学生の殆どが剣道部に在籍しており、授業で習った内容等について、毎日の部活動でそれらを修得すべく、事理一致の修練・修行を実践できる体制をとっている。つまり、剣道論・実習と剣道部活動は内容的にも表裏一体的なものであると考えてよい。

では、本学が目指す優れた剣道指導者とは何かを考えたとき、まず1つに剣道の実技能力が高いこと。2つ目にそれに伴う理論が構築されていること。3つ目は審判能力が高いこと。最後に、高い指導能力を有していることがあげられ、一般的にこの4つを総合して剣道指導者としての資質が問われるようになる。上記の1、2つ目の項目は学内での授業・部活動を基盤に毎日修練しているが、審判能力や指導能力を高めるには、やはり「経験」を積むより他はない。審判については、数年前より学内実習（授業）で学びながら、年に数回大隅地区を中心とした少年剣道大会に審判員として加勢にいており、学生は少年剣道大会を実際に審判することで審判力を高めている。

そして、指導力の養成については、鹿屋市武道館で行われている少年剣道の指導を手伝うことにより、剣道指導者としての基盤を築き、さらにその資質を向上させることを目的として、鹿屋市剣道連盟の指導者達の理解・協力を得て、試験的に実施するようにした。そして、この活動は大学と地域との交流の場を持つ一つの手掛かりにもなると考えている。

本稿は、平成12年5月より剣道部活動の一環として現在行われている鹿屋市武道館少年剣道指導実習活動の一部を報告し、その中から問題点・課題などを発見し、剣道の指導力の向上及びその方法を検討する資料を得ることを目的とする。

## II. 指導実習が行われるまで

### (1) 鹿屋市武道館での少年指導の背景

現在の鹿屋市武道館は平成10年4月に新たに落成され、少年部の指導は週3回（月・水・金）の午後6時から7時までの間に行われており、18名（平成12年5月時点）の少年部員を鹿屋市剣道連盟の理事を中心とした高段者（6、7段）数名が交代制で指導にあたっている。

### (2) 実習が行われるまでの手続き

まず、本学剣道部顧問より指導実習の協力の要請を、4月開催の第1回理事会での検討議題にかけ、了承された。その上で剣道部スタッフと少年部指導者との間で数回にわたりミーティングを行い、実習の主旨を説明、確認された。以下の項目が、双方で確認された実習コンセプトである。

鹿屋市武道館で現在実施されている剣道指導の補助を行う。

鹿屋市武道館を、少年剣道の指導を通じて、本学剣道部員と地域住民との交流の場とする。

鹿屋市及び大隅地区近辺の剣道愛好家と本学剣道部との稽古などの交流の機会をつくる。

これら3項目をコンセプトとして、少年部員とその保護者たちの承諾も得、5月8日に第1回の指導実習が行われ、現在に至っている。

### (3) 実習体制・組織について

図1は、本実習における簡単な体制（構成図）

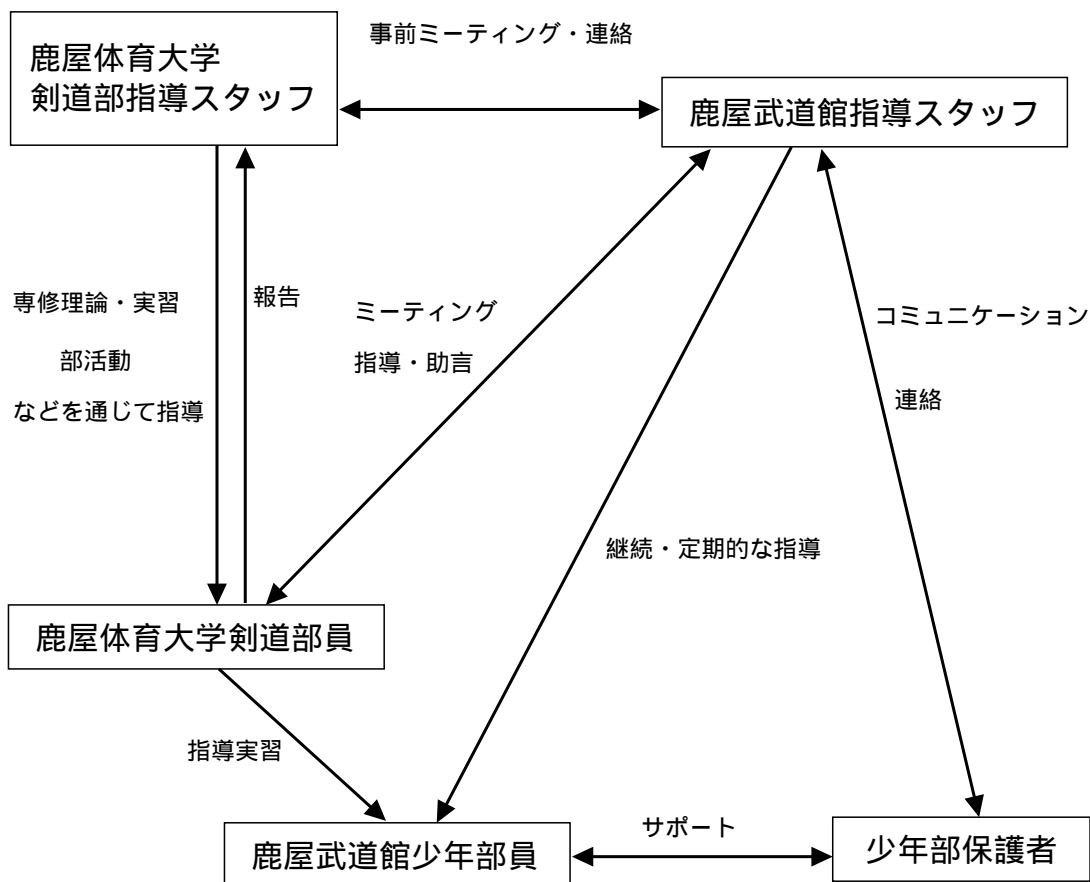


図1. 鹿屋市武道館における少年剣道指導実習組織図

を表したものである。剣道部スタッフ，武道館少年部指導者，学生（剣道部員），少年部員，少年部父兄のそれぞれの関連するパートで常に報告・連絡等を取り，調整しながら指導・サポート体制をとるようにした。そして，少年部指導者とのミーティングにおいて，以下のこと（実習の心得）を確認し，部活，授業において説明，指導を徹底した。

- ボランティアの立場でおこなうこと
- 指導者や父兄の懇親会等には絶対にかかないこと
- 試合の引率も（頼まれても）おこなわないこと
- 指導者の先生方とのミーティングを綿密に取る

- こと
- 試験期間中及び長期休暇中の期間は指導補助が出来ないので，スケジュールの調整・連絡を怠らないこと
- 指導内容について十分にアドバイスをもらうこと
- 道場内外での挨拶を徹底すること
- 常に礼法の実践を心がけること
- （少年）指導にふさわしい言葉遣い・行動をすること
- 指導者としてふさわしい着具・着装を心がけること
- 指導報告書を作成すること（教官に提出）

適切な指導をおこなうために十分な事前準備をしておくこと

自分の役割を把握し, 分担しながら効率的に指導及び補助ができるように心がけること

派遣された学生は必ず少年指導後の一般稽古会に参加し, 個々の実力養成をも図ること

武道館指導者, 教官との報告・連絡・相談を徹底すること (特に代表者)

以上の心得を十分に理解させた上で指導力向上のための実習に入っていた。

### Ⅲ. 指導実習内容について

表1は, 今回の実習を行う学生の内訳人数である。男子47名(4年生7名, 3年生16名, 2年生13名, 1年生11名)と女子20名(4年生9名, 3年生2名, 2年生6名, 1年生3名)の67名が3~4名ずつ交代制で実習に加わった。さらに, 表2では1・2学期の実習スケジュールを示した。現在(2学期終了時点)まで48回の実習を行っている。(1学期, 5/31が休み)

#### (1) 指導報告書の作成

実習内容については, 毎回, 学生により作成・提出される「指導実習報告書」(図2)により確認している。報告書の内容は, 活動内容についてそれに対する点検評価(5段階評価) 実習の反省と課題(記述)の3項目から成っている。

#### (2) 指導報告書を通しての実習内容の検討

##### 活動内容

技術の習得においては初心の段階の指導のあり方がその後の発展に大きな影響を及ぼす<sup>1)</sup>ので, 1時間間に準備運動から主運動(稽古), 終末・整理運動をする中で, 主に基本動作, 繰り返し,

表1. 指導実習学生の内訳人数

学年別	男女別		合計
	男子	女子	
4年生	7	9	16
3年生	16	2	18
2年生	13	6	19
1年生	11	3	14
合計	47	20	67

表2. 1~2学期の指導実習スケジュール

指導回数	1学期	2学期
	派遣日	派遣日
1	5/8	9/1
2	5/10	9/4
3	5/12	9/6
4	5/15	9/8
5	5/17	9/11
6	5/19	9/13
7	5/22	9/18
8	5/24	9/20
9	5/26	9/22
10	5/29	9/25
11	5/31	9/27
12	6/2	9/29
13	6/5	10/2
14	6/7	10/4
15	6/9	10/6
16	6/12	10/11
17	6/14	10/13
18	6/16	10/16
19	6/19	10/18
20	6/21	10/20
21	6/23	10/23
22		10/25
23		10/27
24		10/30
25		11/1
26		11/6
27		11/8
28		11/10

## 指導報告書

日時：平成 年 月 日

氏名：\_\_\_\_\_

指導者：\_\_\_\_\_

人数： \_\_\_\_\_ 人

活動内容<技能> ○印

- |                    |              |           |
|--------------------|--------------|-----------|
| 1. 切り返し            | 2. わざの（約束）稽古 | 3. 打ち込み稽古 |
| 4. かかり稽古           | 5. 互格稽古      | 6. 引き立て稽古 |
| 7. その他の稽古（ _____ ） |              |           |

自己点検チェック項目

できなかった                      ふつう                      よくできた

1                      2                      3                      4                      5

1. 前回内容からの引き継ぎはうまくいったか..... (                      )
2. 事前準備（学習）は十分にやったか..... (                      )
3. 言葉遣いは適切であったか..... (                      )
4. 指導用語は適切であったか..... (                      )
5. 指導者からのアドバイスを十分に実践できたか..... (                      )
6. わざの説明・示範は適切且つ充分であったか..... (                      )
7. 子供たちの学習意欲を喚起できたと思うか..... (                      )
8. 礼儀作法・挨拶は適切であったか..... (                      )
9. 安全管理・確認は充分であったか..... (                      )

自己評価<反省と課題>

図2. 指導報告書の雛形

（わざの）約束稽古，打ち込み稽古を主体に剣道の基本中心の指導が成されている。

また，段階別に応じたグループ指導体制も学生

の指導参加によって可能になった。さらに打ち込み稽古などのときの元立ちにおいても，常に複数名立つことで，かなり効率が良くなり，内容も質

表3. 1学期及び2学期の実習内容の点検項目について

自己点検チェック項目	1 学 期			2 学 期		
	N	Mean	Std Dev	N	Mean	Std Dev
1 前回内容からの引継はうまくいったか	19	3.53	0.96	28	3.54	1.00
2 事前準備 (学習) は十分にやったか	20	3.15	0.59	28	3.46	0.84
3 言葉遣いは適切であったか	20	4.20	0.62	28	4.54	0.74
4 指導用語は適切であったか	20	4.00	0.79	28	4.25	0.65
5 指導者からのアドバイスを十分に実践できたか	20	4.35	0.67	27	4.04	0.71
6 わざの説明・示範は適切且つ充分であったか	20	3.65	0.75	28	4.00	0.90
7 子供たちの学習意欲を喚起できたと思うか	20	3.65	0.75	28	3.79	0.96
8 礼儀作法・挨拶は適切であったか	20	4.30	0.73	28	4.64	0.56
9 安全管理・確認は充分であったか	20	4.10	0.85	28	4.39	0.74

表4. 1～2学期の集計結果

自己点検チェック項目	1 学期, 2 学期		
	N	Mean	Std Dev
1 前回内容からの引継はうまくいったか	47	3.53	0.97
2 事前準備 (学習) は十分にやったか	48	3.33	0.75
3 言葉遣いは適切であったか	48	4.40	0.71
4 指導用語は適切であったか	48	4.15	0.71
5 指導者からのアドバイスを十分に実践できたか	47	4.17	0.70
6 わざの説明・示範は適切且つ充分であったか	48	3.85	0.85
7 子供たちの学習意欲を喚起できたと思うか	48	3.73	0.87
8 礼儀作法・挨拶は適切であったか	48	4.50	0.65
9 安全管理・確認は充分であったか	48	4.27	0.79

の高いものになってきているといった感想が (指導者側より) きかれている。

点検項目に対する自己評価 (5段階評価)

指導実習内容の自己点検項目は、9つの項目を設け、それらに対し、5段階で評価を行わせた。表3は、1学期及び2学期の実習内容の点検項目を集計し、評価を点数化してその平均及び標準偏差を出したものである。

1学期は合計20回の実習で、「前回の内容の引き継ぎ」は $3.53 \pm 0.96$ 、「事前の準備」は $3.15 \pm 0.59$ 、「言葉遣い」は $4.20 \pm 0.62$ 、「指導用語」は $4.00 \pm 0.79$ 、「指導者からのアドバイス実践」は $4.35 \pm 0.67$ 、「技の説明・示範」は $3.65 \pm 0.75$ 、「子供の学習意欲の喚起」は $3.65 \pm 0.75$ 、「礼法・挨拶の実践」は $4.30 \pm 0.73$ 、「安全管理・確認」

は $4.10 \pm 0.85$ であった。

2学期は合計28回の実習で、「前回の内容の引き継ぎ」は $3.54 \pm 1.00$ 、「事前の準備」は $3.46 \pm 0.84$ 、「言葉遣い」は $4.54 \pm 0.74$ 、「指導用語」は $4.25 \pm 0.65$ 、「指導者からのアドバイス実践」は $4.04 \pm 0.71$ 、「技の説明・示範」は $4.00 \pm 0.90$ 、「子供の学習意欲の喚起」は $3.79 \pm 0.96$ 、「礼法・挨拶の実践」は $4.64 \pm 0.56$ 、「安全管理・確認」は $4.39 \pm 0.74$ であった。

### (3) 実習の反省と課題

1学期の主な反省点としては、自己評価点が低かった、「前回の内容の引き継ぎ」「事前の準備」「技の説明・示範」「子供の学習意欲の喚起」について如何に今後の課題を見出すかにある。

「前回の内容の引き継ぎ」については各グルー

ブ間でのミーティング及び指導者としての自覚が不足していた傾向が見られる。学生にしてみれば、実際に子供を指導する初めての体験ということもあり、とまどってしまったようにも思われる。「事前の準備」についても同様のことがいえ、指導実習を学生自身が積極的に捉えなければならない。「技の説明・示範」については、正しい技術を人に理解させることの難しさを示している。自分の技術の「正しさ」を見つめ直す良い機会ではないかといえるであろう。「子供の学習意欲の喚起」については非常に難しい問題であり、経験を重ね、指導者とのミーティングを重ねる中で、子供一人一人の特徴を少しずつ掴んでいかなければならない。

2学期については、9月1日より、合計28回の指導の中で、1学期に比べて全体的に見て自己評価点は高くなっており(表3)、学生の方にも少し余裕がでてきている傾向が見られる。唯一下がっている項目の「指導者からのアドバイスの実践」ではMean±SDが $4.04 \pm 0.71$ と比較的高い評価であることから、現場の指導に慣れ、良い意味で任せられているようである。

しかしながら、「前回の内容の引き継ぎ」が $3.53 \pm 0.96$ から $3.54 \pm 1.00$ とほぼ変わっておらず、1学期の反省の各グループ間でのミーティング不足の課題が達成されていないこと、「事前準備」に関しては、1学期よりは上がっているが、 $3.46 \pm 0.84$ と他の項目に比べ最も低く、まだまだ学生の勉強不足、自覚が低いことは否定できない。さらに、「子供の学習意欲の喚起」については1学期同様、特に難しい課題であり、その方法論を今後研究し、工夫しながら指導現場に導入する必要がある。

#### IV. 総括

表4における1～2学期(48回)の実習報告から、指導現場での課題点は次のことであった。

1. 複数名、交代制での指導なので、各グループ間でミーティングを密にして前回からの内容を引き継ぐこと。
2. 上記のことも含め、事前に準備を充分に行う

こと。

3. 子供にわかりやすく技の示範・説明をすること。
4. 子供のやる気・意欲を喚起させる工夫をすること。

平成12年5月より開始した少年剣道指導実習活動の実態を、年度半ば途中ながら振り返り、少年指導において課題となる点を考えると、実際指導を行った学生から、自らの勉強不足や技術指導の際の示範に自信がなかったなどの声がきかれた。これらのことは自己の評価点が低い項目と一致している。学生は自らのやる気、学習意欲の喚起が、子供達の意欲をも呼び起こすことが出来ることを理解しなければならない。と同時に、指導者(スタッフ)側もまた学生の剣道に取り組む姿勢をさらに前向きにさせる努力をしなければならないと感じた。その一つとして、剣道指導用語をさらに深く吟味精選し、学生に対し剣道の理解力を深めさせることで、積極性を引き出せるのではないかと考える。今後は指導する際の対象に応じた適切な指導用語の研究もさらに必要になると考えられる。

今回の実習は、剣道部スタッフ、学生共に初の試みであり、試行錯誤の状態でのスタートであったが、本資料によりその実態、問題となる点が浮き彫りになったことが成果であろう。今後は、本資料を一つの手掛かりとして剣道指導用語も含めた指導の手引きのようなものを作成し、本実習の質を高めていくことが当面の課題である。

#### 謝 辞

本指導実習において、この主旨を理解し快く学生を受け入れてくださった鹿屋武道館少年部の指導者の方々、御父兄の方々、少年部員に心より感謝の意を表します。

#### 参考文献

- 1) 全日本剣道連盟，幼少年剣道指導要領 [改訂版]，第3版，10-16，1986
- 2) 井上正孝，剣道はこう学べ?その理論と実際，初版，玉川大学出版部，116-133，1986

- 3) 國分國友, 中寛和, 剣道, 第3版, 清風学園教育  
研究所, 1981